

南無阿彌陀仏の葬儀

二階堂行邦

目
次

一、南無阿弥陀仏の葬儀

- いま葬儀は……………1
- 葬儀の空洞化……………5
- 死が見えなくなった……………10
- 懺悔のお通夜……………12

二、死からのメッセージ

- 阿弥陀のはたらき……………17
- 死を消していくのか……………22
- 南無阿弥陀仏の出来事……………26
- いのちのゆくえ……………33

三、自分が自分となる

- 大信心は仏性なり……………44
- 往生は凡夫のはからいならず……………48
- 教条では救われない……………53
- 悲しみに聞く……………57
- 仏弟子となる……………62
- あとがき……………68

一、南無阿弥陀仏の葬儀

■ いま葬儀は

いまに始まったことではありませんが、首都圏に住むご門徒さんの葬儀事情は、その大多数が葬儀社さんまかせの状態だと思えます。

そこで、故郷のお寺のご住職に本来お願いすべき葬儀を、今日お集まりの首都圏の寺院のみなさん方に代行で執行していただく制度が生まれたいです。それに携わるみなさん方のご苦勞は大変なことだと思いません。葬儀を縁としていかに真宗門徒として、念仏にめぐめていただくという大きなお仕事です。

そこでまず首都圏での大方の葬儀の現状から確かめてみたいと思います。

す。

真宗門徒の葬儀は、昔からその地方の浄土真宗の生活慣習の中で、寺を中心とする共同体があり、その中で同じ念仏者同士がみんな葬儀を出すという門徒葬が本来の姿でありましょう。その長い慣習の中の出来事ですから、葬儀の意味ということは、暗黙の了解の中で南無阿弥陀仏の心をもって行われてきたのだと思います。

ところが、いま全国的な都市化の嵐は、習俗としての葬儀も急速に変わらざるを得ない状況をもたらしています。

この東京においても、いままで故郷の寺とも念仏とも、あるいは聞法もんぼうということと無縁であった方が、さまざま事情で故郷から出てこられ、そこで家族を亡くして、真宗の葬儀をするということですから、葬儀を

たのむ遺族も、受ける僧侶も、非常にやっかいなことに会うことになります。

残念ながら、私のおります寺でも真宗門徒でありながら、同じ門徒として信仰共同体というかたちでつながっている人は、ほんのわずかです。あとの人は、ほとんど墓参り中心のかかりです。墓参りという縁だけで寺院との関係が保たれている人が多いのです。その中で南無阿弥陀仏に依よって葬儀を執行するということは、たいへんな願心と勇気と情熱が要請されてきます。

私もずっと長いこと住職をやってきて、葬儀がどんどん葬儀でなくなってきたということを痛感しています。ひと言で言えば、葬儀が企業化されている。空洞化している。世俗化している。葬儀社さんも、葬

儀が何なのか、わからないで企業としてこなしているだけです。葬儀社さんも、本当は困っているでしょうね。

そうなりますと、葬儀をたのむ遺族も、いよいよ葬儀そのものをどうして勤めるのかわからなくなる。「それならば葬儀をやめてお別れ会でいいんじゃないの」というような傾向が進んできます。いま、葬儀社さんの話だと数年前で平均して二〇パーセントの人は「葬儀はいらぬい、お別れ会でいい」と答えるそうです。あるいはまた、茶毘葬たびざうというように、葬式をやらないで、火葬場の炉の前で勤行ごんぎょうするだけの場合も多いそうです。「正信偈しょうしんげ」さえも勤める時間がないのです。

私のおります寺でも去年、何件かありましたが、葬儀はしたいのだけれども、お金がかかってとてもできない。年寄りの独り暮らしで、子どもがいないので、甥おいや姪めいが葬儀をする。そういう少子化時代の家族の状況もあります。その中で、葬儀をしようということですから、その人の人生の最後を受け取るためにはどうしても葬儀は必要なんだということ、どこで言えるかということがよほどはっきりしないとイケない。そのことがいよいよ僧侶にも門徒にも問われてきたのです。

■ 葬儀の空洞化

葬儀の意味が不明だということは、現代の社会的問題ですが、その根本には、仏教の伝統的儀式が空洞化し、教化が観念化しているという問題があると思います。

それは近ごろ話題になってきた「自然葬」の問題にも出てきています。

寺の門徒でこういう人がいました。立派な父親の墓があるのですが、その墓に夫のお骨を入れないで、富士山に行つて散骨してきました。いわゆる自然葬をされた方です。私もはじめは、「家の墓にこだわる必要もないから、それはそれでもいいのではないか」と言つたのです。しかし、そうは言つたものの、では「墓とはいつたい何なんだ」ということを私自身もきちんと押さえないままでいた。墓に執着する人ばかりがたくざんいるけれど、むしろ仏教は墓からの執着を解放するものではないかというところが、本当にどこで言えるのかということを引きちんとしないまま、いままでできてしまつたなど、近ごろあらためて思うのです。

親鸞聖人は、

それがし 某親鸞閉眼せば、賀茂河にいれて魚にあたうべし

〔改邪鈔〕真宗聖典690頁

と仰せられたという。にもかかわらず遺のこされた弟子たちは大谷びやうしやう廟堂を建て、さらに真宗本廟、本願寺を相続してきたのです。

江戸時代までの人びとは、墓も造れず野山に散骨していたのでしよう。しかし現代では、故人の遺志で山や海に散骨して自然に帰すという。その帰るべき自然を私たちはどれほど勝手に利用し害し続けてきたことか。その慙ざん愧ぎがいまの散骨にあるのでしょうか。

われわれ真宗門徒には遺骨を埋葬する墓よりも、むしろ家庭内の本尊ほんぞん（お内仏ないぶつ）を毎朝夕大切にお参りしてきました。死んだら無に帰するといふ人がいます。いまその人は無に帰する生き方を求め、どう実践しているのでしょうか。いまの生き方と無関係な死後の「無」とは、単なる